

熊 谷 利 幸（西区）

すでに、大震災から一年か過ぎようとしている。震災直後に比べて街は小ざれいになったものの、至るところに爪跡が残っている。震災は市民の服装も変えたようで、以前の華やかさはなく、震災ファッションとでも言うべき地味なものが主流となっている。

あっという間に過ぎた一年という感じで、それだけにある意味では充実した時間だったのかもしれないと思う。この一年間を振り返って思い出になることと言えば、子供と2人で震災後二週間位した頃に神戸駅まで行った時のことである。地下鉄は西神中央から板宿まで部分開通しており、板宿からは市バスで神戸駅まで行くことになった。板宿周辺は道路、建物とも損傷がひどく、バス停は大変混雑していた。道路も渋滞していたが、なんとか無事神戸駅まで着き用事を済ませることができ、再び板宿行きのバスに乗った。

たしか復路を半分位過ぎたところだったと思う。前方で火事があり、道路が閉鎖されてしまった。このため我々乗客はバスを降り、目的地まで歩かねばならなくなった。子供を連れてきたことを後悔したが、他の乗客と共に2人で歩いていった。途中、電柱や家が傾き歩道にせりだしており、ガレキの山が至る所にみられた。20分位歩いた頃、喉が乾いたので飲み物を買うために近くの店に立ち寄った。その店は木造2階建てで、かなり傾いていたが営業しており、中学生位の女の子が店番をしていた。余震が続いていた頃でもあり、状況がきわめて悪い時であったが、その冷静な対応に大変感心させられた。今はその建物は恐らく取り壊されていると思うが、その情景は今でも心に強く残っている。

多数の死傷者を出したにもかかわらず、市民の冷静な対応は世界的にも称賛されており、適切な国家的支援さえあれば十分に復興しているものと確信している。

小 柴 孝 夫 (中央区)

阪神・淡路大震災復興支援対策委員長所感

この度、神戸市医師会に会長諮問委員会(36条)阪神・淡路大震災復興支援対策委員会が設置され、不肖私が委員長を引き受けることになった。諮問事項は「阪神・淡路大震災会員への復興支援対策について」で、答申期限は平成8年3月31日となっている。この機会に今回の大震災を体験して、今考えていることを述べてみたい。

まず震災直後の官と民の動きをふりかえると、官は動けず、民は俊敏に動いた。即ち管理機構の徹底した国、地方自治体などの行政機関は情報通信、交通機能が瞬時にして破壊された今回は即時応体制がとれず、大幅な対応の遅れをとった。縦割りやTopdownの一方向性の弊害がこれに拍車をかけ、行政の硬直性、脆弱性を露出したと言えよう。

他方、地域住民は破壊による混乱のなか、冷静で的確と思える行動をとった。整然と秩序ある避難行動、避難所で自然発生的に出来上がった自治組織など。そして混乱に乗じた放火や略奪などの醜聞は聞かれなかった。又いち早く全国から夜を徹して援助に駆けつけた未組織の外部ボランティア。その多くは学生を中心とした若者であったことは強く世間に印象づけた。と同時に近代科学を結集したといわれ、先端都市の象徴としてのアーバンリゾート神戸は、巨大直下型地震で都市機能は瞬時にして崩壊し、多くの教訓を残した。この事実を基本に構え、分析、評価し、今後の災害対策の道しるべとしなければならないと考えている。

では、日常市民医療を担当する診療所や病院はどうであったか、特に震災初動期の状況は?、個別には震災記録誌や、体験記などで窺い知ることが出来ても、その全体像の詳細を客観的に示す資料は見当たらない。医療機関についてはマスメディアは当初から外部医療救護班にスポットを当てつづけ、地元医師の活動は殆ど取り上げることなく今日に至った。しかし、災害初動期最も問題にしなければならないのは、所謂Phase 0-1(48時間)の医療救命救護活動である。この時期は医師会自体も情報通信、交通網の遮断で全く動きが取れなかった時期でもあった。又、診療所医師、病院勤務医師、看護婦をはじめその他の医療スタッフ自身も多くは地域住民と同様被災者たらざるを得なかった。しかし、医師は当然のこととはいえ、自らの職責を立派に果たしたと断言してよいと考えている。このことは中央区医師会の初動期(72時間)にあげる診療所の活動状況調査報告書(PartI)で既に検証されているところである。

さて、当初の混乱から地元医師会としての、避難所を中心とした医療救護活動を終え、いよいよ災害対策本部から復興本部に衣替えし、冷静さを取り戻した時期に自らの診療所、病院建物や医療機器などの被害の大きさに今さらながら愕然とし、事態の深刻さを痛感した会員も多数おられたと思う。

病院、診療所で被害額が数千万と一口に言っても、決して小さな数字ではない。元通りの復旧、再建となれば新たにその数倍の資金が必要となるケースもあると思われ、被災会員の前途は甚だ厳しいと言わざるを得ない。被災会員の1日も早い復旧再建こそが、新しい神戸の地域医療再構築の

大前提となる。

被災会員の支援策として当面考えられることは、医療施設近代化施設整備事業適用条件の不備、健康保険一部負担金免除期間の延長、新都市計画による大規模公営住宅、集合住宅の医療施設配置計画、医療施設再建の阻害要因としての区画整理、医業経営不安定要因としての住民過疎化、被災地区での無制限な会員外による新規開業etc.の問題解決が考えられるが、いずれも法制上の制約などの理由で会員個人、地区医師会の力では如何ともしかたい。しかしこのたびの壊滅的な大災害で甚大な被害を被った医療施設に対しては、地域医療と、公共性の高い社会医療資本確保の観点から、適正な緩和措置がとられても良いのではないかと考える。

県医師会、日本医師会はこれらのことを充分ご配慮の上、厚生省はじめ医療行政と関係機関に強く働きかけて頂くようお願い申し上げたい。この時期に神戸市医師会皆木会長が阪神・淡路大震災復興支援対策委員会を設置された英断に感謝するとともに高く評価したい。

この委員会は諮問主旨からいって息の長いものとなると思われる。被災会員が勇気づけられ、意欲を持って診療に従事できるよう少しでもお役に立てる委員会であることを念じ、今後委員各位の英知を結集し、各区共通又は個別の課題等に充分検討を加え、その具体策を探り、市医執行部と共に一丸となって問題の処理に当たる所存であります。

市医師会はもとより、各区医師会及び全会員諸氏のご協力、ご支援を賜ることを切にお願いし、私の所感といたします。

(神戸市医師会報平成7年11月号より)

是 則 隆 一(東灘区)

あれから1年

平成7年1月17日大地震、あれから1年。 ドーンと地鳴、同時にドシンと胸の上に大きな塊が乗ってきた。地震?まさか我が家が壊れるとは考えられない。しかし重く苦しい。痛い。呼べど叫べど返事なく、そのうちに何も判らなくなった。気がついた時は親戚の洋間で蒲団の中、1月20日の事である。数日後、隣の文化住宅が壊れた我が家の上に乗っかっているのをみて納得。

思い返せば、1月14～15日、大阪で保育所・保育セミナーがあり、15日遅くまでかかって報告書を書き上げ、16日に家内と長浜の盆梅展に往き鷺尾先生にお会いした連休の翌日の出来事であった。

救出されて、正気になって、家族から2日間の様子を聞かされた。大混乱の中を東灘区医師会の事務長さんや、地区理事の先生、長老の先生が見舞いに駆けつけて頂いたそうで、医師会の有難さを実感すると共に、救出して下さった地域の皆様に対し感謝し、お世話になった全ての方々に心よりお礼を申し上げます。

肋骨骨折も略治し、壊れた診療所を応急修理したので、平成7年5月より診療を再開したが、付近に家がなく、人口分散し、開店休業の状態。1日数人の患者さんと震災当日の事やその後の様子を話しながら、無事を喜びあっている。あれから1年、少しずつ復興の様子がみえてきた。しかし元のようにするのは何年先のことか。我が家も再建しなくてはならない。設計図を書いては消し、消しては書き、完成するのはいつのこと。

地震で失ったものも大きい、得たことも大きい。このことを今後の糧として、地域のために小児科医として出来るだけの奉仕をしなければならないと思う。

近 藤 七 郎(垂水区)

震災後1年を経て

震災からのこの1年は夢中で短かったと思えるし、他方、長かったような気がします。神戸の中心街、殊に目抜き通りは整理されているが、中心から一寸離れると、現在取り壊しが行われているビル・家があり、被害の大きさを、未だ復旧していないことを物語っています。

JRをはじめ私鉄の交通網はやっと復旧しましたが、高速道路の方は未だ復旧せず、予定より早く、今年の10月頃とのことで、そのために神戸市内の道路では慢性的渋滞が起こり、日常生活に種々支障をきたしており、高速道路の一日も早い復旧が望まれます。震災後、暫くの間は道路が寸断されていたために交通量も減り、交通事故も減少していたが、道路事情が良くなるにつれ、今度は交通違反や交通事故が増加しているとのことです。

医療機関の復旧も進んでいる一方では、診療不能96、廃院47で、関係者一同この対策に努力されている所です。此の医療機関再建のためのキーポイントの一つは、資金問題です。公的・私的金融機関の融資も、借り方の年齢・担保・利率と煩雑な手続きなど問題があり、公的資金の医療施設近代化施設整備補助金ではその条件の厳しさには驚かされます。幸いに診療所が再建できても、隣接地に居住者が少なく医業経営が成り立たず、この対策に苦慮している会員もあります。患者受診率にしても、震災直後の大幅な落ち込みは仕方ないとしても、震災後1年を経ても被害の大きな地域の回復は遅く、地震前の受診率に戻るのは何時になるかは予想もつかない状態です。「免」について言えば、皆様会員のご努力(署名・アンケート及び関係当局への陳情など)にも拘わらず、平成8年1月からこの「免」の特例は撤廃され、患者の窓口負担が増大したことは大変残念です。

国では、阪神大震災問題は既に解決済みであると考えているやに伝えられますが、現地を見る限り、復旧すらまだまだ時間がかかり、これからの方がより大切ではないかと思われます。被災地の私達は根気強く関係当局に働きかけると共に、お互いに力を合わせて復旧に、更には復興に向けて努力をせねばなりません。

執行英毅(灘区)

救難船を作ろう

阪神大震災から1年がすぎた。考えていると色々のことが頭の中を去来する。地域の危急存亡の事態に対して、対応する能力が自分に足りなかった悔は山々ある。一方で、行政の危機管理の稚拙さは目を覆うばかりで、注文したいことも数多い。中でも、医師として痛感したことは、大規模災害時の救急医療のシステムとしての全面的な不備であった。災害の渦中であって、多くの医療関係者が粉骨碎身の活躍をしたものの種々の規制、部門毎のセクショナリズム等、考え方や制度の硬直性のため、災害の現実に対する著しい不適合に直面していたのは残念なことであった。

いろいろある考えの中で、災害対応のため集中的な能力を持つ一つの単位として、船舶というものを考えてみた。たとえ小さくとも外洋を航行できる船であれば、一定の期間は完全に自立する能力をもつことが出来るからである。

船舶を利用した例として、先年の湾岸戦争で、アメリカは大型油槽船を昼夜兼行で病院船に改装し、現地に急派して成果をあげた。その有用性については詳細に研究したデーターが公表されている。関東大震災のとき当時の海軍は、直ちに艦隊を品川沖に回航して、救護にあたり、物資や罹災者の輸送等に従事した。今度の震災では、六甲アイランド病院は透析患者をボランティア船で海上輸送を行っている。自衛艦は大阪天保山より神戸港へ援助物資とともに、1日100トンの給水支援をし、浴場を仮設し、給湯も行った。そのうえ、海陸自衛隊員の休息補給のための基地としての機能も果し、艦上の浴室を一般市民の使用に供して艦名に因んだ“みうら湯”という愛称で市民の感謝を受けている。このときの自衛艦に、もし高度の救急組織があれば、その恩恵は測り知れないものであつただろう。50年前の氷川丸の活躍を憶いおこせばよい。病院船として最高の機能を備え、戦場を移動しつつ、多くの貴重な任務を果たして来たのである。

日本は細長い列島であるうえ、無数の島々から成っている。岐阜や長野の内陸はじめ、国内の如何なる地点でも、洋上の船舶からヘリコプターで到達し得る。ヘリ装備の病院船があれば、然るべき泊地から日本全国の災害地に対して、救急の手を差しのべることは可能である。また、被災地で窮地にある救急医の能力を発揮させることも可能である。

ヘリ装備の船舶の有用な事は明らかだが、その使用目的は医療に限ることはない。根本的には災害対応の現地司令部としての任務が先行すべきだろう。救急医療の他に、現地偵察、情報収集と発信、交通連絡、消火、補給(給水、給食)、発電等々、基地としての船舶に対しこれらの機能を期待することは可能である。要は運用のための制度の確立である。

この目的には、たとえば南極観測船のような、多目的型でボリュームのある船がピッタリであろう。特別新たに建造するまでもなく、かつて活躍した砕氷艦「ふじ」が任務を解かれ、いま記念艦として繋留されている。少し手を加えれば、救急病院の機能を併せ持った優秀な救難司令船に生まれかわらせることができるはずである。問題は平時の管理、機能の維持にかなりの経費がかさむことだろう。然しこの任務のためには平常よりの研究や訓練の必要があり、災害待機の傍ら、レス

キュー隊の訓練の基地として利用の道がある。さらに東アジア、オセアニア地域の災害救援も視野に入れると、新しい日本の国際貢献の分野も開かれることになるのではないかな。

震災以来各方面で、災害対応の方策が色々と模索されている中で、総理大臣に直結の、救難に関連してある広い権限を附与した、救難指令船というものを考えてはどうかと思うのである。

(c)1996社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

瀬 藤 晃 一（灘区）

震災後1年を経過して

1)雑感

あの忌まわしい大震災から1年、1月17日が再びめぐってきました。震災1年特集のTVの画面を見ると、あの電気も、ガスも、水もすべてが途絶した中で行われた、医療の凄絶な場面が数々よみがえってきます。あれは一体何だったのか？あの高揚した気分のなかで、不眠不休で働いた1ヶ月は夢か幻だったのでしょうか。1年経って、瓦礫の山が取り除かれて空き地が目立ち、大幅に人も減った今、日本の政治、行政の貧困さにあきれ、中でも住宅問題はこれで解決していくのかと、寒々とした感慨を覚えています。又、医療問題もしかり、現在病院にとって震災対策が充分に出来たかと問われれば、それはNOと言わざるをえず、情報連絡システム、水対策、非常電源対策、緊急要員の住居問題等々すべてがまだこれからで、色々取材を受けても思わず自嘲気味になってしまいます。関東、東海地方にも大地震が迫っていると言われていた今、私達の教訓は果たして生かされているのでしょうか？これは何も地震に限ったことではなく、政治、経済、教育、医療、環境等と、すべての日本のシステムが曲がり角にきて、制度疲労を起こし、何とかしなければ、日本は21世紀には、過去の英国がそうであったように落ちぶれてしまうと考えるのは私だけでしょうか？政治家や官僚には自己改革の能力がなく、行財政改革も掛け声だけで、財政破綻が目前に迫りつつある現在、救国の大政治家でも現れて官僚の無責任主義、権威主義、縦割行政、国益よりも省益、局益といった考えを打破しないと日本の前途は危ういと真剣に心配しています。

2)大火災

1月17日から数日間、各地で起こった火災は長田区を中心に猛威をふるい、辺りを焼きつくしました。生きたまま焼かれた人の無念さを思い、又、あの火災現場の跡の寒々とした光景は、終戦直後の神戸市街の様子とそっくりそのままで、TVに映しだされた状況は、自宅が昭和19年3月17日にアメリカ空軍のB29の爆撃で全焼した時のことを思い出させます。三重県の尾鷲付近を北上したB29が、あの腹にこたえるような爆音とともに低く飛来し、神戸を焦土としました。我家の方に真っ直ぐ飛んで来たB29の編隊の姿は今でも目にやきついており、爆弾、焼夷弾が地面に突き刺さる振動が段々近づいてきて、やがて遠ざかっていった恐怖は、この度の震災の振動と性質は異なるとは言え、軌を一にするようにも思えます。我家はあっという間に全焼、私の少年時代の写真も本も、すべての思い出もその他一切のものが焰と共に消滅しました。翌朝は寒い朝でしたが、家の焼跡に茫然と立ちつくした時の感慨は今も忘れることが出来ず、今回の震災後の火災の被害者の方々の心境も恐らく同じであろうと思います。まだ40代だった父が、私達兄弟に“またもう1回一からやり直した”と叫んだ言葉が、今でも私の耳に残っています。今回の震災で私の実家は無残にも崩壊しましたが、それでも貴重品だけは、その後掘り出すことが出来ました。それに反して火災で全

焼された方々が、無一物になられた悲しみと怒りは、私にはよく判るような気がします。これらの方々の1日も早い復旧、復興を祈りたいと思います。

3)運命

40年になる医師としての生活の中で種々の場面に遭遇し、私は次第に人間には避けがたい運命があるという運命論者になりました。今回の地震でもほんの一瞬の時間差、或いは場所の差が生と死という人間の運命を左右しました。私が永年診てきた患者さん方の中からも数人の方がお亡くなりになり、誠に痛恨の極みです。先程述べた神戸の空襲の際も、第1回の空襲(3月17日)で我家が全焼したあと、6月5日の第2回の空襲で、その焼跡に爆弾が落ち、直径5～6mの大きな穴があきました。第1回の空襲で家が焼けなかったら第2回の空襲の爆弾で死んでいたのかも知れません。何か運命のいたずらのようなものを感じます。(余談ですが、神戸市医師会の鷲尾隆広報部長とは当時お隣で一緒の日に焼けました)

私の残された人生も残り少なくなってきました。私の勤務する病院も建物の被害は比較的少なかったとはいえ、地盤、道路、塙壁等に多額の被害を受けました。これから本格的復旧に取り掛かるところです。病院の維持、更なる発展を夢見るとともに、住民の方々を中心に考えた医療の提供を、これからも目指したいと思っています。

宋 龍 啓(中央区)

環境変化とメンタルヘルス

震災から一年以上が経過し、最近、被災された人々のメンタルヘルスが注目されています。

今回は、震災のために住み慣れた地域から転居、転校を余儀なくされた人々の精神衛生について、特に仮設住宅に住まざるを得なかった人々について考えてみたいと思います。

環境の変化や日常生活の不便さなども精神衛生に大きな影響を及ぼすのは当然のことですが、人々の内面の問題、心の持ち方について気になることを述べてみましょう。

「仮設住宅」とは、仮りに設置された住宅という事です。しかし人間は、言葉の持つイメージに引きずられやすい存在です。仮設住宅に住んでいる自分の生活は仮りの生活であり、本当の生活ではないと考えると、生活そのものに新鮮さや興味を失ってしまいます。これが無気力、抑うつ、不安、不眠、その他の心の不健康に陥らせる原因です。

この状態は、例えば会社から異国に長期出張を命じられた人によく起こります。自分のこの異国生活は仮りの生活であり、自分の本当の生活は、期限が来て日本に帰ってから始まると考えたとき、現地の生活に溶け込めなくなり、生活の生彩を失ってしまいます。しかしこの場合、期限が来て日本に帰れば治ります。ひるがえって仮設住宅に住まざるを得なかった人々について考えてみましょう。

突然、期限なしで仮りの生活の場面に置かれた人々にとって、我慢するのも本当に苦しいことでしょう。しかし大切なのはここです。余儀なくされた仮設住宅での生活であっても、これも自分の大切な生活の場面であり、何をしていても大切な生活の時間なのだと考え、日常生活に興味を持つ努力が大切です。仮りの生活と考えると、無気力、抑うつが牛じ、生活そのものが崩壊してしまうでしょう。

メンタルヘルスについて、専門家に相談することも大切ですが、被災地の生活を仮りの生活とせず、一日も早く、震災による環境変化に負けず、生き生きとした生活を取り戻してください。

(広報こうべ“エプロン医学”より)

高 橋 章 三（長田区）

先日、小学校の同窓会に出席した際、女の子(現在はオバハンになっている)から「ネエ高橋さん、子供の頃の一年間って何か物凄く永いように思っていたけど、年令と共に一年間が短く感じるようになった来ただけど、ナンデやろ？」と問われたので、エエ格好したがり的小生は直ちに次のように答えました。「それはナ××子ちゃん、10才の子供にとっては一年は人生の1/10やろ、そやから永く感じられるんだヨ、我々の一年は人生の1/63だから短く思われて当然なんだヨ。エヘン」ところがこれが受けて、皆が「そうだ、そうだ、残りは少ないのだから時間を大切に生きよう」と、変な具合に盛上ってしまっ、結果的に三次会迄つき合わされる破目になってしまったのですか、実際問題として1995年という一年間は本当に早かった。何か物に憑かれたように全力疾走して終ってしまった年でした。そろそろ自分のベースに戻さないと、63才は残りが少ないのですから…。

この一年、失った物も多かったですが、得た物も多かったように思います。失った物(物質損害は除外して)で一番大きなものは、人間の心が信じられなくなった事でしょう。私はいつも“愛”という言葉をもットーに生きて来ました。自分が誠意を持って接すれば必ず相手に伝わると信じて来たのですが、世の中には愛も情も持ち合わせていない人間が如何に多いか、つくづく知らされました。地位や名誉や肩書きばかりこだわって、他人の事は知らんぷりをしている結構著名なお方達。もっとひどいのは、あの混乱の最中に人の弱味につけ込んで儲けようとする奴等。或いは震災を口実に働こうともしないグウタラ人間。そういう人達を見ていると腹の立つのを通り越して、むしろその心の貧しさが気の毒にさえ思えて来ます。しかし逆説的に言えば、これは私が失ったものというより人間を見る目が出来たという大きな得点かも知れません。いや!そう考える事にします。自分が一寸賢くなったと信じます。そう考える方がこれからの人生にプラスになりますから…。従って得たものと言えば本当に“愛”を持って私と接してくれている人達の暖かさです。家族と友人、この人達の本当の価値を改めて知った事が大きな大きな収穫でした。それと、意外に自分の神経がタフである事の自覚。(自分ではデリケートでナイーブと思っていたのです。ホント!)モ一つ意外なのは、行動力が不思議にある事です。これはこれからの人生に大きなプラスになると思います。

最後になりましたが、行政不信は昔からで変りはないのですが、復興・復興と言ってそれなりにやってくれるのも解るのですが、何か庶民の感覚からいうと、一寸ピントがずれているんじゃないだろうかという気がします。破壊→復旧→復興というプロセスが普通だと思うのですが、破壊から一足飛びに復興へ持っていくのは一寸無理かあるように思われてなりません。それこそ階段を一度に5段程飛び上るようなもので、無理があると思うのです。やはり階段は一段一段上っていくものだと思います。いい例が区画整理に引っ掛かっている人達で、来年の米一俵より今日の大根一本の方が必要な人達に3年も先の夢物語をしても、結局はそれは弱者切り捨てか、弱味につけ込んでいるとしか思われません。政治音痴なので難しい事は解りませんが、弱者(被災者)としてはあまり気持の良い方法ではないように思います。

とにかく、あれから一年過ぎました。「たかが一年!!されど一年!!これから何年?」今の正直な気持です。まだまだ先は遠い・・・

(平和な神戸が一日も早く帰って来るのを祈りつつ...)

(c)1996社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

谷 本 恒 幸(東灘区)

荒れ野に叫ぶ声

忘れようとして、忘れられない、思い出したくもない、1月17日午前5時46分も、今年は静かに時を刻んだ。昨年この時刻に、あの呪わしい大地震が阪神・淡路の各都市を崩壊し、6308名の命を瞬時に奪った。あれから1年、肉親、知人、隣人との別離の悲しみと、再会の喜びの、日々のドラマは終わった。あとに残ったものは、荒涼とした空白の地に抜けた櫛の歯のように建つビルの群れ、そこには人の住めないマンションが、ぽつりぽつりと姿を見えている。今尚、解体中のビル、解体か修復か決まらないまま放置された無人の高層マンションが影を落としている。家を失った人々は市外、県外へと、縁故をたどって移り、頼るあてない8万の被災者は市内とはいえ、辺鄙な地に建てられた仮設住宅に住み、少数の人達がテント生活を営み、学校の一隅で、雨露をしのいでいると聞く。それぞれに震災時の冬、春から猛暑の夏、そして秋を経て、再び寒い冬を迎えた。一年間は長くもあり短くもあった。

商業地で生業を営んでいた人々はいち早く、更地に復旧の灯をかかげはじめ、土地を持つ人々は住み家を造り始めた。

医院はどうであろうか。全市でも被害の大きかった東灘区内の医院の約半数が全半壊し復旧は未定であり、崩壊・撤去された病院や周辺の医院が更地になったまま放置されているのを見るにつけ涙の出る思いがする。いつ再建されるのであろうか。無傷の医院、まがりなりにも残った医院と、消えた医院との差は大きく、非情である。同時に患家も数多く無くなり離散して、市外、県外の遠いところに行ってしまった。年末になり、「やっと帰って来ました」と患者が訪れて見えた時の嬉しさは何にたとえようか。

けれども、街の荒れ野は広がったままである。私の親しいカトリック神父の叫ぶ声に耳を傾けよう。

「阪神大震災の被災者の人々よ。

今、あなた達は荒れ野にいる。

住まいを奪われ、

小さな仮の住まいに押し込められ、

住まいのあった土地は更地となり、

そこに立てばまさに荒れ野だ。

そこに立って耳を澄ませば荒れ野に響く声が聞こえる」

行政は地震で倒れたのを、火災ですべてが消失したのを機として、地震前からの都市計画に取り掛かり、補給基地との名目で空港を造るという。今は、人々に一刻も早く住む家が必要なのに。空港に注ぐ金で人々の家がどれほど出来るか想像もできない。『株式会社神戸』の手法は何一つ地震前と変わってはいない。なぜ行政は元の土地に住みたいと願う、しかし家を建てられない人々に替

わって土地を買い上げ、借り上げしてでも安い公営住宅を建てないのか。人々が元の土地に住みたいのは地震の直後に家族みんなが、住民同士が協力しあってその温もりを取り戻したいだけなのに。どうして、そんな素朴な願いが聞き入れられないのかと考えてしまう。

「そこでは老人は助けられ、
幼い子供は守られ、
子供達は大人に協力し、
外国人も日本人もなくみんなが共に生きた。
そして、家族の、住民の絆が深められた」

大地震は命と物を奪い、人々の生活環境を変えてしまった。しかし、多くの知られなかった心を得ることが出来た。それは助け合い、隣人愛であった。今、被災者が求めているのは、復旧であり、次に復興である。

新春に届いた年賀状は例年に比べて多く、すべてが安否を尋ね、更に励ましの言葉が書かれてあった。

みんなと一緒に引き受けて生きる、『痛み、悲しみ、苦しみ』を追悼する朝が来た。

そこ、ここに点在した荒地に手向けられた花束は今、改めて悲しみをさそう。

俳句2句『寒椿』 谷 本 あや子

夢の世や思い定めて寒椿
去年今年17日の震に生く

常 深 幸 生 (北区)

物別れの美学

人間は早かれ遅かれ、すべてのものと、別れねばならぬ運命にある。今回の震災で別れを余儀なくされた人は多かったと思う。私もその一員で、自宅、大正時代のモダンな洋館と別れをつげた。おいしいと思うが、金銭のことを、いっているのではない。現今では職人が居ないので、再現不可能だからである。私の死後、又誰かに愛してもらえたのに。

震災の当日、私は自転車以北野町の異人館に走った。そこもサンタンたる有様で愕然とした。その後、神戸の文化財が、つぎつぎと失われたことを聞くにつけ、しかたがないなあと、あきらめた。

人生には冒頭にいったように、別れのあるのが常である。その時あまりに事物に執着するのは、みぐるしい。金丸氏も財にこだわらなかつたら、歴史上の人物になったかも知れない。

平家物語は亡びの美学であり、西行、芭蕉は、すべてを捨て、旅に出ることによって、自己の美学を確立した。兼好、鴨長明は世捨人の美学を演じた。形あるものは必ず亡びる『色即是空』欲はほどほどにすべきである。

ここで偉大な詩人、白楽天に登場してもらおう。かつて、社会党の党首、片山哲の訳文を引用。

「浩歌行」、こうかこう、悟りの詩

天長地久無終畢	天長地久、しゅうひつ、なし(宇宙無限)
昨夜今朝又明日	さくや、こん朝、又、明日(きわまりなく廻ってくる)
鬢髪蒼浪牙齒疎	びんばつ、そうろう(まばらに白く)がし、そなり
不覺身年四十七	おぼえず、身のとし、四十七
前去五十有幾年	まえに、五十を去ること、いく年かある
把鏡照面心茫然	鏡をとり、めんをてらし、心、ぼう然たり(年をとった)
既無長繩繫白日	すでに、長じょうの(長いなわで)白日を、つなぐなく(太陽をとめられない)
又無大藥駐朱顏	また、たいやく(不老長寿の薬)の、しゅがん(紅顔の美少年)をとどむるなし
朱顏日漸不如故	しゅがん、日にようやく、もとの如くはあらず
青史功名在阿処	せいし、こう名(歴史に名をとどめること)いづこにかある
欲留年少侍富貴	年少をとどめ、富貴をまたんと、欲すれば
富貴不來年少去	富貴きたらず、年少さる
去復去兮如長河	去り、また、去りたり、長河の如し
東流赴海無迴波	東流、海におもむいて、かえる波なし
賢愚貴賤同歸蓋	けんぐ、きせん(賢い人も金持も)同じく、きじんす

中略

我今所得亦已多	われ、今、得る所、亦、すでに多し(ガツガツしない)
功名富貴須特命	こうみょう、富貴、すべからく天命をまつべし

命若不来知奈何　　命もし来らずんば、いかにすべきか、知らざるなり

この中で「おぼえず身のとし47」が印象的で、この時代は50才で老人としていたようである。我々も自覚すべきだと思う。

何事でも別れを告げた時、心の中に洞穴があき、そこをサヤサヤと風がしみわたる、さわやかであると同時に淋しさがつきまとう。「無一物、無尽蔵」と強がり言いたいが、なんだか割り切れないものが残る。

以上、今回の震災で色々のことが山積したが、個々にとらわれることなく、『浩歌行』の心境にあやかりたいと念ずる。

終りに、ひとこと、愚痴は品格を下げる。

平成8年1月15日

〔追記〕　　神の器

神の救いというものは、目に見えるものではないが、過去どれだけの人間を救ったかによって、神も裁かれる時が来た。この震災で多くの神社仏閣が倒壊した。

しかし山に鎮座ましますお地蔵さまは、なにごともなく、そそとして町を眺めていらっしゃる。たおれた社は、いささか金のとりすぎではなかろうか、神仏とはいえ「器」以上のものを望めば、入るものもこぼれるであろう。しょせん五合の榊に一升は入らぬ。天網恢恢疎にして漏らさず、謙虚、感謝こそ有難き幸せ。合掌。

平成8年1月22日

とき田 吉 房(兵庫区)

あれから一年

平成7年1月17日午前5時46分に大地震が阪神、淡路をおそって、はや一年が経ちました。震災で6,000人以上の人達、開業医の先生も県下で8人の方々が亡くなった由です。

思い起こせば、一年前の事が頭の中をかけめぐる。大地震後、電気はまもなくついたものの、水道、ガスが止まってしまったのは致命的でした。近所では火事が発生し、倒壊した家の下敷きになった人数が“助けてえ”と叫びながらどうする事も出来なかったそうです。火事は兵庫、長田、須磨にも起り、焼けるにまかせた。2ヵ月に至る水道、ガスの途絶は、今思えば全く悪夢のようでした。皆、誰もが一生忘れる事の出来ない苦しい、そして長いものでした。被災者は30万人との事で、大部分は小学校や中学校に避難した。ボランティアは各地からどんどん応援に来てくれました。自衛隊の方々も大活躍されました。おどろいたことには、被災者の暴動とか掠奪などの大事件は全く起こりませんでした。むしろ被災者は粛々と配給品をうけとったのです。水の配給も労力を大いに要したが仕方ありませんでした。水洗トイレもつまらずに使用出来た。しかし入浴は、最も皆、苦勞したようです。私は幸い弟が須磨区の高倉台に住んでいて、そこは全く被害がありませんでしたので、週に2回、風呂に入れてもらいに行く事が出来、何とか助かりました。ゴルフ場なども風呂を開放してくれました。

それにつけても、大地震発生直後の政府の対応のまずさは、縦割行政の欠点をまざまざと見せつけられ、マスコミに何度も指摘、報道されました。地震後、オウムのサリン事件、中川長官の狙撃事件、中国やフランスの核実験の強行、東京都の安全信用組合、東京協和信用金庫、木津信用組合の倒産、兵庫銀行の破産、米国での大和銀行の10年間に亘る1000億円損失の発覚、沖縄の米兵少女暴行事件に端を発した、沖縄県民の知事を先頭にした米軍基地反対、代理署名拒否、住専破産による金融機関への公的資金導入問題等、誠にあわただしい事件の続出でありました。

医師会では、いろいろな方々の震災の体験談やその間のもようを文章にされ、発表されました。県医師会、市医師会、区医師会の各単位でかなりの先生方が協力されました。各医師会がボランティアを結成して、小学校、中学校で出張診療に参加し、それも3ヵ月程で大きなトラブルもなくほぼ終了する事が出来ました。

一年たって、それまで何回かの震度3～4程度の余震がありましたが、始めの頃の又地震が起こらないかという心配はだんだんとうすらいで来ました。

又、その間、地震専門家等の地震情報や予知の可能性とか、活断層の場所の地図等の公表、報告などもあり、阪神地方には当分大地震は来ないだろうと言う、楽観的観測も一部で広がってひと安心の状態となりました。

阪神大震災後一年たって、尚、仮設住宅に余儀なくくらしている被災者は、尚、9万人、テント生活者は数百人、神戸市内だけで400人あまり残っておられる由で、仮設住宅の期限の問題やマンション再建にかかる規制の為の難問、高齢者の生活不安などもあり、家さえ壊れなかったら悠々と

老後の生活が出来たであろう人達を含め、この度の地震をのろい、うらんでいる人達はどれだけおられることでしょう。

終りに昨年も、阪神淡路の被災地に見舞に来られましたが、改めて本年1月17日、震災一周年記念日に再び、皇太子、皇太子妃始め橋本首相、村山前首相、政府の主だった人達も、亡くなられた方々への追悼式典に来神されました。

誠に有難い事と存じます。

(c)1996社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

鳥 山 紀 彦(垂水区)

不条理

9月頃、震災についての別の原稿依頼があった。結局思うように書けず、あらためて“震”を読みかえしてみた。皆様の作り物でない生の迫力、感じた時に出来るだけ早く記録するという、リアルタイムの重要性を知る。

実は「R・バースのサイン入りヘルメット」という題で一応年末までに原稿を作っておいた。内容は、建直しに近かったジャッキアップに際して、不要な物を捨てた時の話である。火災にあったと思えばという感覚から、殆ど衝動的にガレキと共に処分した。医学書をはじめ、40年近く前よりとっていた“舵”のバックナンバー今からおもえばおしかったような気がする。医学書のあいだに、ヘソクリをはさんだままではなかったか、も気になる。過去の思い出の品々も殆ど捨てた中で、優勝の年のライトスタンドでさわいだ時に、かぶっていた神様バースの直筆サイン入りのヘルメットにまつわる話だ。しかしこの原稿はく1月17日に考えた事>という、リアルタイムの感情を書けという編集者の意図にそぐわない。

1996年1月17日-鬱である。この2、3日の新聞テレビは「特集」の花火。神戸の中で生きている者の目と、外からの者の目の間に、何かハガユイ違いがある。どう表現してよいかわからないが。今は震災について、とても総括できない。大体私は被災者づらをしてよいものか。いや、森南地区、菅原商店街、鹿の子台仮設以外にも、被害者でない神戸市民は一人もいないであろう。私の場合、結構ボディーにこたえた住の問題はともかく、さまざまな不条理が回りに存在する。震災の影響としか考えられない不条理な数件の離婚。生きる気力がなくなったとしか考えようのない、自然死の増加。<がんばろうエネルギー>の減少。

カラ元気をだして、年末より97年返還前にと、香港のマイポ地区に、鳥見に行った。香港は恐らく世界一、人口密度の高い所であるが、そこに存在する自然(=野性動植物の存在)とその保護にかける努力は、並大抵のものではない。各保護区には、大勢の公務員レインジャーが多数配属され、市民を指導している。郊外では駅近辺の高層住宅地区を一步出ると、野性の猿がいる。広大な保護区マイポへの立ち入り資格監査は厳重。銃を持った、シャレた格好の国境(或は環境)警備員以外、殆ど人影がないのに、終日全域禁煙の淀は厳しかった。日本の国家的な、自然資源に対する無関心さは、例えばナショナルトラストの原点と言われる天神崎、自治体の道路整備、それに伴う釣り人等の増加、何を考えているのかあきれはてる。知床はすでに、西表島もそろそろあぶないだろう。

帰国後NHKスペシャルアンコール「生命40億年はるかな旅」「150億光年・銀河の旅」を見た。「震災に強い、住みよい街づくり」というが、本当にゼネコンとのしがらみ抜きに、先のことまでを考えているのか。美し都KOBEと言うが、そこには震災前より、渡りの水鳥が休める川は既になかった。原始ブナ林は殆ど反対もなくニュータウンに変わった。かろうじて少し自然の残っていた近郊の加古川も、震災後何の相談もなく、災害時の南北道路確保という美名のもとに、アッと言う間に

<懸案の>破壊が成されつつある。人類という高度に進化した猿が、はたして次の神戸大震災まで生き残れるのか。猛烈なスピードで進む、地球環境の破壊による、日本を先頭とする、人類の破局は、どんな楽観的な環境学者でも、数百年とは言わないだろう。悲観的な学者は2030年～2050年位と予測する。これはずっと先の事のように思えるが、次に阪神が優勝する数字に近い。私はどうせそれまで生きていないし、タイガースのマインドコントロールもすっかり解けてしまったので、別にどっちでもいいことですが……。我々は豊かさを求める権利が有るし、景気もよくならないといけないだろうし。

おそらく自然保護なんて、世界的に見てもう手遅れに近いのではないか。地震という、地球のきまぐれが、何か警告を与えているように思えてならない。それにしても、よりによって、このおだやかな我が街神戸にこなくても。

やりきれない不条理感は、いつまで続くのであろう。

中 井 準（西区）

阪神・淡路大震災からの1年

あれからの1年間、なにを見ても、なにを言っても、なにを聞いても、「震災」なのであった。三宮を歩いても、電車の窓から見ても、崩れた家や瓦礫は撤去されたものの、あちこち、さら地ばかりで、道路に痛ましい凹凸の残っているところもあり、今更ながらあの地震の巨大なエネルギーは、それを想像しようとするだけで気が遠くなるような心持ちがして恐ろしくなるのであった。また、もうやめようと何度も思いながら、口を開けば「あのときはねえ...」とか「あのあとでねえ...」といつの間にか「あの地震」の話しになってしまい、また一旦「あの地震」が話題になると、決して地震からそれることはなかったのである。被害のいろいろな実情を見、かつ聞くほどに、たいした被害をうけなかった私自身は、私の見たのも聞いたのも、実感したと思ったのも、この例えようもなく巨大な大地震がひきおこした出来事のほんの一部であって、大きな被害を受けた方々が感じられた恐怖、痛み、悲しみ、絶望感などや、皆さんが苦勞された本当のところは、私がいくら想像を逞しくしても及ばないという感が深まるばかりであった。

また一方、この無限に近いようなおおきなエネルギーを人間が利用する手段はないものかと考えたりしたが、いつ、どこで起こるか予知のできないエネルギーを利用するなどは、ほとんど不可能であろう。しかし、地震という形で消滅する前にだんだん蓄積されて行くエネルギーを少しずつ利用してしまえば、地震はおこらないしこれほど望ましい解決法はないだろう。ずうっと将来、地球が消滅するかもしれない程の将来にはそんなことが可能になるかも知れない。などと、些か馬鹿げたことも頭に浮かんだりした。

この大地震でたくさんの教訓を得たが、その一つは、この複雑な人間社会、なにごととも一度には成って行かない、一朝一夕にできたものはないということである。人間の社会が形成されるには、いろいろ試行錯誤があって、長い年月を経て形成されるのである。試行錯誤のように見えても、それは必要な順序、手続き、積み重ねなのである。だから、一例として、被災地の医療機関ということを取り上げると、診療所、病院が地震で潰れてしまった、早く再建してもらわないと、その町には安心して住めない、診療所がもどってくれば、私達ももとの町に住居を再建しようという、至極もったもな住民の要望がある一方で、住民がいなければ患者がない、したがって診療所としては経営かなりたたない、皆さんが住居を再建されればそこに診療所をつくりましょう、とまるで「鶏と卵との関係」になってしまうことが起こり得るのである。ずっと昔、その町に診療所、病院のできた経過を振り返ると、1軒、2軒から始まった住民の数が増加して、何百人、何千人に増えたとき、診療所がひとつでき、更に人口が増え、診療所も増えるということを繰り返してきた筈である。何百かの診療所、病院ができるには長い年月かかっている。この長い年月をかけて築いてきた町が、いろいろの機能を備えた都市が、アッという間に崩れ去ったのは返す返すも残念である。われわれも被災地の医療ネットワークの早期再建には全力を注がなければならないが、ある程度の時間が必要なこともまた事実だとおもう。これまで、われわれ日本人は急ぎ過ぎたのではない

だろうか?再建には破壊以上のエネルギーが必要である。それこそ気の遠くなるような巨大なエネルギーが必要であろうが、われわれは、一歩ずつ、くじけることなく、着実に進んでいかなければならないと思う。

(c)1996社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

中 島 保 治 (東灘区)

震災後1年をふり返って

頻繁に続く余震が減速化してきたのが、今になってみると夢のような思える。だが、又最近、日本各地で地震報道が活発化しているのも無気味であるが、自然に逆らえないのが基本であろうか。阪神・淡路大震災後は多少とも、殆どの人達がPTSDに苛まれつつも、あの忌まわしいすべての事をつい忘れがちになることがある。正直なところ、命を再度与えられた私にとっては、この1年間、忙しく動き廻っていたことが逆に幸いしてか、ゆっくりと思い出す暇がなかったのかもしれない。自宅も診療所も、未だ補修完了ではないが、なんとなく諦めの境地で、急がず、焦らずという気持ちが先行している今日このごろである。

被震直後、臨月(1月18日予定日)であった娘を、決死の覚悟で(自動車の中で破水したらそれまでと思い出すとぞっとするが)延々9時間かけて、京都まで無事に連れだし、某病院に収容できたことに幸運の念を禁じえない。その孫も順調に育ち、もうすぐ1年を迎えることになるが、逆境の中で生まれたのであるから、特に可愛く、強く成長してほしい気持ちが、偽らざる期待である。

地震後、時々家内が満月だと地震(余震を含めて)が起こるという予言をするので、以前までは余り気を付けて見上げなかった空をみると、実にすばらしい満月の時が多いような気がした(冬空の所為かもしれない)。飼っている犬や猫も又敏感である。自然に対する反応が人間と違うのであろう。

種々の面で援助してくれた、高校時代の友人達が私を慰める会を催してくれ、故郷に行ってはみたが、感謝の気持ちと裏腹に、なぜか陰湿と憤怒が見え隠れしたまま帰神したのである。これらの解消のためには、昼は時間があれば家に籠もらず外へ出かけて散歩することにした。しかし外は更地の所が多く、夜は暗く、閑散と寂しく、路を歩くと非情感で一杯となる。又、このような時期に医師会の仕事をよくもまあ仰せつかったと思う反面、これがかえって私個人の苛立ちを少しは取り除いてくれる清涼剤になったのかもしれない。(仕事も十分にせず、何を忙しくしていたのかとお叱りをうけるかもしれないが)

最近、新聞沙汰となったペットボトル(命の水)、クリーニング店の排水(井戸水)など体調に変化もなく、当時の状況からは感謝の気持ちのみである。それよりも、かくの如き事は、地震前より行政として検査判定をもっと早く行うべきだったと思う。怠慢と遅延が現在の日本の象徴かもしれない。

何はともあれ、震災ルック、借金コンクリートなる流行語を貴重な経験として、ややもすれば孤立する私達の職業の中で、震災同志なる立場の元に、仲良く前向きに歩いていかなければならないのが、現状ではなかろうか。

中 野 篤(兵庫区)

震災閑話2題

先々月の或日、私は義弟の3回忌法要の為、久しぶりに西脇郊外の妹の家に出掛けた。決して短くはないお経が終わって、一同揃ってお墓参りに行っの帰り道、私はわざと一人遅れて田舎道の風情を楽しんだ。小春日和の陽ざしを背に、重なり合い、こすれ合う音が聞こえて来そうな、たわわに実をつけた富有柿、さざ波のような秋風に揺れるコスモス、逆光に透けて、濃淡の緑の織りなす白菜畑の絨毯などを、眼で道の左右に追いながら、秋あかねの飛びかう道を一足一足とそぞろ歩き、時折立ち止まっては身体一杯に田舎路の空気を吸い込みもした。その時、私はふと、私自身が大自然の中に溶けていってしまいそうなこんな感覚には、もう随分と長い間出会っていなかったような気がした。思えば、私は、震災から今日まで、無我夢中で、神戸の街中を駆け歩くような生活をしてきていたのだろう、だから無理もないのだと自分に言い聞かせるように独り言ちていた。

昨日、平成8年1月17日が無事に通り過ぎて行っ。それにしても、この一年は早かった。特急電車で窓からの景色を瞬きの間に飛ばしながらの、あっと言う間の一年だったような気がする。だから今年各駅停車でのんびりと、旅の風情を楽しみながらの一年にしたいと“身に沁みてひたぶるに”念じている。

1) 青天の霹靂

あの日、午前5時46分、何が何だか分からぬ時間が過ぎて行っ。その、半ば夢半ばうつつの中で、一瞬私は“死が来た”と思った。と同時に私は隣のベッドの妻を確かに両腕にしっかり抱きかかえていた。……それから数日して、ようやく、我が家族にも人心地が戻って来たある日の夕餉時、妻や子供達の前に、これまで夫として当然の事をしたまでのことと思って、あえて口にも出さないでいた、あの時の美談?を初めて披露に及んだ。ところがその時妻から返って来た言葉に、私はしばらく言葉を失っていた。「何を言ってるの。お父さんはあの時ベッドにしがみついていたじゃないの」そう言えば、あの時間帯でのパニックでは、夢と現実の交錯があっても不思議ではなく、あの瞬間の私の記憶は、妻が私より弱いかな否かの話しは別として、弱いものを庇おうという人間本来の本能が顔をのぞかせた一種の錯覚ではなかったであろうか。また実際に、知人の精神科医の話によると、被災者の地震後の記憶の中には、かなりの部分に錯覚があるということで、些かほっとはしたが、私の場合、家族を前にしての首長としてはかなり面目ない錯覚ではなかったろうか。私にとってあの地震が大きな「青天の霹靂」とすると、妻の返事はまさしく小さな「青天の霹靂」であった。……10月の半ばの深夜、震度4の地震があつた。しばらく地震から遠ざかっていたせいか、意識下の恐怖が強烈に甦ってきた。ここで私はようやく夫権を取り戻し、同時に帳尻を合わせることに成功した。私は腕の中にタシカに妻を受け止めていたからだ。

2) “ああ、今でなくてよかった”

ふと思う。Ausのまっ最中、サクシヨンのモーター音に混じって患者の安らかな寝息が聞こえている。ああ今でなくて良かった。また、ふと思う。行きつけの床屋でカミソリを当たってもらっている。眠気を催して来た。ああ今でなくて良かった。また、ふと思う。二人の子供達はそれぞれ学校へ、妻はデパートへ買い物に、私は一人茶を飲みながら野球のテレビ観戦と、ごく普通の日常生活のパターンだ。ああ今でなくて良かった。また、ふと思う。妻が台所でてんぷらを揚げている。ジュジュジュという音とともに、芳しい香りがこちらの居間の方まで漂ってくる。ああ今でなくて良かった。……私は、ふと、この度の震災の時間帯について考える。あの午前5時46分という時刻は、まず、殆どの家庭では家族揃って未だまどろみの床の中にいた時間帯でも、また暗闇からやがて明け行く時間帯でもあった。言い方は些か不謹慎かも知れぬが、あの地震が、どうしても回避出来ないものだったとすれば、5時46分という時間帯は、それより早くても不可、それより遅くても絶対に不可という、ある意味ではせめてもの救いと言えれば救いの時間帯ではなかったかとも言えよう。例えば、これより2、3時間早かったら真っ暗闇のパニックが、もし1、2時間、いや数時間遅かったら、関東大震災以上の阿鼻叫喚の地獄絵を見ていたに違いない。だから、私には、今回の地震がどうしても避けられぬ自然界の「運命(さだめ)」だったとするなら、ひょっとしたら、せめてその時間帯の配慮だけでもと、何か大きな力が働いたようなそんな気がしてならないのだ。

(平成8年1月18日)

西 田 芳 矢 (中央区)

「ペットボトル」...そして未来へ

本当に動物よけになるのだろうか...

冬枯れの梢は最後の一葉を残して、存分に広がった青空を背景に百舌の悲鳴は一段とけたたましい。山茶花の純白だけが極立つ丘の公園、あの時までは白球を追って歓声の絶えなかった野球場の外野フェンス脇にキラリと光るものがある。あの時大活躍したペットボトルである。要人の度重なる視察とは緑のない仮設住宅140戸が、冬陽を浴びてグラウンドを占領している。割りと早くからここに移り住めたその老人は、グラウンドを掘り起こし、ネギ、白菜を植え付け見事な菜園にしまった。フェンスにスイトピーの蔦を絡ませ、廃屋から持ち出した観葉の鉢をいくつかぶら下げた。ペットボトルは土止めの外回りに、老人の律儀さを示すようにキチンと、かなりの本数が並べられている。住居の基礎ブロックの間は羽目板を無造作に二枚打ち付けただけ。床を伝わる夜の冷気はすさまじいと聞いた。上がりがまちの段差をかばう、これも廃材の板のスロープ、薄くはなっているが確かにこう読みとれた。「二人とも無事で○○中学に居ます」...でも老人は今は独り、あの時前後の詳細は聞きづらく、又本人の口も重い。

液状化で名を馳せた人工島の会議場、この一年間様々なシンポジウム会場となった。

夏の盛り、「市民震災フォーラム」.....病院も、消防も、保健所もそしてボランティアもよくがんばった。それしかない。その時点ではそれで良い。

9月、「神大震災シンポ」.....公的病院の使命感を燃やし、多くの業績、教訓を残した。しかし“皆頑張った、でも5000人が亡くなった、それな無いだろう”そんな独白も聞えて来た。関連死を加えてこの一年でその数は6300余名となった。

秋も深まり11月、「県医師会シンポ」.....各団体、医療機関の主張に共有点もなく、シビレをきらした大阪の救命センター所長は“もし大阪がこうなったら今度は兵庫県におんぶにダッコをお願いしますよ”と決めつけた。一年ぶりに激震地長田を訪れたAMDA代表は“神戸の今後は世界中が注目している。でも行政の出来る範囲はせいぜいこの程度のものなのです”と講演を締めくくった。

“行政だって被災者だ”とうそぶいた役人(それも医療畑)の無神経ぶりはさておいて、住民も生来の物分かりのよさか、大阪、京都があつての神戸という土地柄がそうさせるのか、あまりに無口にすぎないか...。とは申せ確かに「行政対被災住民」とする短絡的構図からは何も生まれてはこないだろう。行政だって、保健所、福祉事務所を充分機能させた事後の対策では将来に資する多くを残した。問題はphase0→1である。震源地北淡町で存外犠牲を最小に留め得たのは、小コミュニティならばこそその消防、町内会自警団等の小廻りの効く素早い動き、それに呼応して常日頃島内唯一の最終処理病院としての自覚、実績を持つ医療機関との見事な連携があつてこそその成果であろう。しかしそれをそのまま大規模都市災害に反映し得るものかどうか...

庁舎の自室にこもり、窓際に備えさせた望遠鏡で毎日町の様子を覗いて物想いにふけるタイプ、身軽に街に飛び出して歯切れよく次々に新構想を打ち出すタイプ、為政者としてどちらが適任か、

それはともかく県は「東部新都心計画」の中に317床の総合病院を併設した「災害医療センター構想」なるものをぶち上げた。情報伝達の核となり、備蓄もでき、そのうえヘリポートも備えた司令塔は確かに心強い。だが平時の総合病院が有事にどれ程機能し得るか、否、し得たか。新機軸を打ち出して、何年間も何百億も費やす前に、この貴重な教訓、種々データを再整理の上、既存のシステムを有機的にリンクする方策こそ急務であろう。妙なプライド、目に見えぬ垣根を取っ払う気持ちさえあれば、これしきのこと、行政の舵取を待たずとも出来る 筈。確かに神戸ではもうないかもしれぬ。だが近隣で近々にこの程度、否、これ以上の悲劇の起らぬ保証は何もない。

老人は、早咲きのスイトピーに目をおとしてゆっくりと言葉を選ぶ。...でも皆それぞれよくやってくれた。だからこうして日向ぼっこもできる。そりゃ先の事を考えると体も震える。でも今は良い。.....これで良い”

ペットボトルは本当に動物よけだけのために置かれているのだろうか...

平8.1.28記

西 村 宏 明 (西区)

あれから1年

時のたつのは本当に早いもので、あの悪夢の大震災から1年がたちました。

ここ数年来、毎年いろんな事件、事故が起きていますが、六千人余りの尊い生命が失われた阪神・淡路大震災は、直接被害にあった者には一生忘れる事の出来ない事でした。

丁度、1年に当る1月17日のテレビ、新聞は一斉にあの上空から撮影した映像を放送していましたが、何度見ても胸が痛む思いで、見たくない光景でした。

幸いにも私の診療所や自宅の被害は軽微で、地震後も何事もなかったかのように毎日診療をしています。診療所が壊れて診察が出来ない、あるいは診察が出来ても患者が来ない先生方の気持には本当に同情にたえません。当初は西区の親戚に避難して来た患者が多くいましたが、現在では、少数の人が元の住所に帰っているようです。自宅周辺の古い家は壊れている所が多かったのですが、その後ガレキがとり除かれ、更地になっている所が多い状態です。

地震ででこぼこになった道路はやっと修理を始めたようで、物理的に破壊されたものについては公共性の事もあり復旧が急速に進んでいます。しかし人的なもの、被災者については1年たった現在も完全に復興に向かって進んでいるとは思いません。職を失った人の就職の件、住宅、被災者の健康面、その健康を守る医療機関の再建の問題等々…。

兵庫区の自宅が全壊し、息子夫婦の家に避難して来た老夫婦、持病の高血圧、糖尿病があり1～2ヶ月薬をのんでいないと言う。幸いにも内服薬により正常に近い値になったが、全身倦怠感がとれない。入院を希望し、入院するも倦怠感はず、不眠を訴え2～3日で帰って来た。今度は同じ兵庫区にある娘夫婦の所に行き、やっと落ちついたとの事。精神的な要素には時間がかかるようです。

患者が減少した医療機関にとって、被災住民に対する一部負担金免除(マル免)は受診率を上げる有効な措置だったが、署名運動をしたにもかかわらず12月末で打ちきりとなった。また全壊した病院、診療所を再建するに必要な資金を調達するには、公的な補助は少ないと言われる。医療施設近代化施設整備事業の適用条件がきびしく、簡単には受けられない事、被災地の住民過疎問題、都市区画整理事業地域における診療所再建問題など、種々な問題をかかえているもにかかわらず、厚生省の対応は消極的で、もっと被災者の身になって考えてほしいと思います。地域住民の健康を守るのは我々開業医なのだから…。

被害は直接あったものしか分らない。

櫨 木 典（西区）

あれから1年

阪神・淡路に悪夢としか思えぬ惨状をもたらしたあの大地震から、早や一年が過ぎ去ろうとしている。年末の特集番組で当時の場面がテレビで映し出される度毎に「甚かったなー」と、今更のごとく恐怖がこみ上げてくるのを覚える。昨年末の集計によれば、震災と震災による傷病で後刻亡くなられた人が、その数六千三百数十名に達したとある。

大正十二年、関東大震災から七十三年、エトでは十二支が六廻りした年に当り、何れも亥年で而も“破壊”を意味した年回りだとされるようだ。

震災は起るべくして起る自然現象であり、地球人類にとって避けることのできない天然の災害とされる反面、それが真実そうと受けとることのできない人為的な側面を併せ持つものでないだろうか。昔から地震・雷・火事・親父などと、怖いものの代表・象徴とされたものだが、今やマイホーム時代、車社会、女性が闊歩し、男性が俯向きで歩く女性優位の世の中、前述の“親父”など、どこかに消しとび、むしろ最も怖いどころか愛すべく、頼りにならない存在となってしまうている。今の若い者達なら哄笑ものだ。

さてこの四つにこだわりを持ち、いささかくどくなるが、火事はやや例外としても、“親父”だけが先刻の人為面の代表者ではないかと思えて来るのだ。

つまり“親父”という卑近な責任者、嘗ては封建家庭での権威者を以て任じ、敢えて卑近な世の中の怖いものの代表としたままで、よく考えれば隣でも近くでもいい、いわば世間なみの当面の責任者ということになってしまうのではないか。

今回、震災後、例によってあらゆる角度から震災、災害の原因や、災害を大きくした要因や側面、さらに救援活動・医療福祉面、専わる人的資源や組織、とくにボランティア活動、復旧や復興のための再建対策、はては新しい町づくりにいたるまで、まさに様々な論議がなされて来てはいる。現今、震災地では、世は挙げて復興の最中だ。

如何に人智を傾け、科学万能を尽して町を、都市を、国家を形成しても、所詮は“親父”に代表される“か弱い人間”の塊がつくったのだから、きっとそこにはそれ相応の弱さや脆さが潜むのではなからうか。

平成七年は戦後五十年という年、半世紀に亘ってまさに営々と努力し、成果を積重ねて来たのだに思うと残念至極、小生ごとき還暦を過ぎてきた者達は、戦争で焼け野原をさ迷い、五十年経ってまた大地震での惨禍を経験したことになる。

-今回震災を詠む-

モンペからパンツにかわり焼野原
「誰かある」「ペットボトルに乾パンを」
肥っちょもスリムも並ぶ炊き出し場
背のリュック満員バスで邪魔になり

“痛勤”で疲れ会社は休憩所

-拙句-

泣くに泣けないが、天命だと諦めよう。

私ごとになるが、一昨年五月末には母が八十八才で急逝、昨年父が九十三才で帰らぬ客となったが、その両親は全く苦勞の連続、父に到っては戦災で焼けた寺の再建に精魂を傾け、老いては臥込んだ最中に震災と、きっちり二つとも勤めあげてあの世に旅立ってしまい、何一つ愚痴も言わなかった。まさに有為転變の生涯といえよう。

卯で生れ酉で焼かれて亥で終る　　噫乎!!

「自分は十一番中九番目の男、苦勞(九郎判官)の連続は当たり前」といいつつよく飲み、冗談をとばし二人の息子を医者に向わせて、寺は末娘と婿に託し悠々と去った。寺は明石市内にあり、天台宗善樂寺戒光院前住職賢純、法名は慈感心院大阿闍梨大僧正法印賢純大和尚、没後正六位を贈らる。生前には藍綬褒章と勲六等端宝賞を受く。　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　　合掌

ジョークのうち、昭和二十九年かの洞爺丸台風で庫裡が再建中に倒壊して懲りたのか、二階の本堂(当時の建物としては珍しがられた)の屋根にすっぽりサケマス流し網を被せ、小生が何故と訊ねると「之はな、サケマス網だから台風除けじゃ」というのである。一種の縁起(ゲン)かつぎかも。

父の生母は「いか」といい、自らが坊主になったことを「いかの子がタコになった」とよく笑わせたものだ。

さて何時の間にやら本文の主旨を外れて飛び火し、“親父”が自分の父親のことばかりとなった。本文に戻らなければ…。

結局のところ、自然災害だといって、全部天変地異の故にせず、当然責任者であるべき人間が眞に全ての叡智を傾け、全能を尽しているかという反問が生ずる。

四十余名の犠牲者を出し、前途有為な学業半ばの内外の青年を一挙に襲った神戸大学生の例でもいえることだが、国立大学生といっても寄宿舍の舍則が厳しく、費用負担やアルバイトに堪えかねて、灘・東灘区内などで民間のアパートや安価な下宿先で遭難死してしまっている。

かかる学生達の救済策などは、将来、是非とも国や自治体などが何等かの対策を考えてよからう。今どき“理”やらと称し、筋違いの愚にもつかぬ屁理屈に近い責任逃れの意見が飛び交うだろうが、将来再び同様な事態が起らないよう真剣な討議がなされ、それなりの結果が実施されて然るべきだ。

科学万能と自負しつつ、その裏面に恐るべき虚像や欠陥が忍び寄っている現実そのものを直視しなければ、眞の未来は期待しえないと思い、敢えて拙文を掲げた次第、諸兄の御批判を乞う。

船 曳 和 子 (灘区)

あせるな きばるな とどまるな

60歳を越す1年は惜しむ間もなく通りすぎる。特にこの忌まわしい1995年はドカンドカンと連発した未曾有のショックで、大きな傷跡に応急処置をしながら癒す治療の方針もたてられず1年が経つ。1月17日のドカンの直後に敬愛していた寂聴尼の「...あの太平洋戦争の焼け野原から立ち直ったじゃありませんか!」というコマーシャルが流れた。しかし、戦争直後とは違い、それぞれの被災度はまちまちで、道路一本隔てて天国と地獄に分かれていた。被災者の立場として、このピントはずれの放送が流れる度に神経が逆なでされ、以前から尼のファンであっただけに残念に思われた。...が、やはり、当事者でなければ、なかなか被災のストレスなど推し量れるものではないのだろう。私達も晋賢岳や奥尻島の時には自分の事として考えられなかったのだから...

被災者は親切にされながら、彼我の大差に落ち込んでいたのである。週に1~2度の入浴に救われ、おいしく暖かい食べ物を頂き、どっさり送っていただいた水や野菜やご飯を頂きながらも、ガレキにうずもり、雨漏りの壁、テレビも電話もない情報の閉ざされた暗闇におびえた。何よりも復旧の格差にどんどん落ち込んでいたのである。皆同じスタートラインではない。心が狭いと言われればそれまでだが、人間には欲があり、それで向上し、前進するエネルギーが生まれてくる。そして自分の能力を判断する智恵もある。

被災地区をA,B,Cとランク分類してみた。文字通り全壊し、全焼し、避難所から更に遠くへ落ち着き先を求めて転出せねばならなかったA地区。減歩のある土地区画整理や都市計画と規制が厳しく、コンテナハウス等で商売を始めたB地区。地震で落下し3ヵ月も不通となったJRの駅とわずか200~300mしか離れていないのに被害ゼロに近いC地区。ライフラインの復旧にも大きな開きがあり、わずか2時間の停電だったC地区に比べて、B地区の一週間の暗闇は人の心まで暗い深みに落としこんだ。

冬の陽は午後4時半を過ぎると急速に暗くなる。早く片付けたいため、陽のある間は水汲みとガレキ整理の重労働に精を出し、ローソクや乏しい懐中電灯の灯火でささやかなインスタント食品に暖をとった。

神戸の中心部は戦後の急速な発展の矛盾を抱えて高齢人口密度が高い。以前と同じ場所で同じ形で...との懐古主義で、前衛的な街作りにはなじまぬ向きも多い。しかも自力での再起不能がほとんどである。

被災面積400haの内、都市計画対象面積は約4%の160haにすぎず、その部に対し国より1600億円の予算措置を受け復興を図っていると神戸市の言だ。国は国家権力を駆使して住専には6850億円という途方もない国費を投じるとしながら、被災援助は過去の処理済の事として、どうあがいても首は縦に振れないようだ。後は自力で立ち上がるしかない。弱肉強食の動物の世界が天災の爪痕に似ている。一匹狼もあるかもしれないが家族愛や同朋愛なくしては立ち直れまい。

同じ県下の西部地区に住む友人も、もう震災の事はテレビの一画面でしかないと言った。他府県

の人や大蔵省、厚生省の役人の「いつまで言っているの。被災は兵庫県だけではないのに」という言葉にすっかりあきらめムードが流れつつある。新しい街作り協議会では地図上で他人の土地の上に線引きをし、公園やビルを作って積み木ゲームを繰り返してきた。夢ばかり追ってきた気がする。皆お金がないからだ。空き家は荒れてくる...と同時に更地ばかりでは街の活性化は望めない。人が住み、流れを作らなければ立ち直りはない。

我々の仕事は緊急時に対応せねばならぬ関係上、一定数の従業員が必要である。最近やっと再開院を始めたばかりの友人が、震災前の20～30%に減収しているというのに従業員の給料の支払いに頭を悩ませていた。わが家も思いきりリストラをした。

2月には市からの決定的な方針が強制力を持つらしい。我家もライフラインや外壁の修繕に大金を投資してしまった今、乏しくなった資本に悩みはつきない。鉄筋の固い建物はなるべく修理して使用してほしいと市の方針も変わり、全壊のお墨付にもかかわらず、壊す時の公費も打ち切りにされると聞いた。

耳に入ってくるのは重苦しい話ばかりだ。昨日より明日が少しでも明るくなるようにゼロからの出発と覚悟するしかない。当初はただただ“ガンバロー”の合言葉しかもたなかった。...あせるな、きばるな、とどまるな...しかし、どこかでChangeを期待しながら時に幻を空に描くのも一興だ。

エッセイスト萩原葉子(76才)の『人間死ぬ前日まで出発と思い未知の才能を捜す』程の賢さは持ち合わせないけれど、私も戸籍年令を忘れて夢を追いつけようと思う。

辺 見 譲 治 (北区)

やるしかないよ

一年目の一月十七日が巡ってきました。

昨年十七日の前夜の月は赤く輝いていた満月でしたが、今年の月の色は正常でした。

またとあのような凄じい地震は起こらないだろうと信じてつつも、早朝めざめた時には心配な十七日の朝でした。

改めて、五千人以上の帰らざる人となった方々の御冥福をお祈りして、現在でもなお不自由な生活を強いられておられる多くの方々の無念さを心に痛く感じつつ、一日を無事に過ごして感謝にひたりました。

あの地震を体験して、天災の凄まじさと、その後の生きる事の大変さを知らされたと共に、平穏で「有難く」生かされている生命に両手を合掌させられました。

あの大きなライフイベントが、私達の身体と心の人それぞれに大きな影響を与え、又その後の平常とは変化させられた生活による、大小さまざまなライフイベントがくりかえされて、私達の人生に大きな明暗があたえられております。

私にとっては、人間の生命のはかなさと共に、生きる力をもった方の逞しさを示され、生きる幸福は目にみえる形而下的な事柄よりも、目にみえない形而上的な心のあり方を教訓として与えられた、阪神大震災ではなかったかと考えております。

先日、某新聞社より電話があり、震災時に出産なさった方々の取材をして、当院で出産なさった方より、看護婦さんがたべたりねたりできない不自由な生活を強いられていた時に、患者さん方に「すみませんね」と言って看護されて心を動かされた事と、金曜日の夕べに職員の方々が賛美歌をうたって病棟訪問をして下さり、その内容が赤ちゃんの歌で心がすっかり慰められました、と言っておられたとの事で、先生は看護婦さん達にどんな言葉で仕事を続けるようにお話をされたのですかと、尋ねられましたので、私は職員に仕事を強制する言葉ではなく、大変な時ですが当院の被害も病院を運営する上では決定的なものではなく、市中の多くの病院の機能が破壊された状態の今は、みんなで頑張って仕事を続けましょう、と訴えましたと答えますと、記者の方は、看護婦さんから先生に「やるしかないよ」と言われました、と伝えられて、ある時は正にやるしかないよと心に思っていたなど、当時を思い返しました。

その後の日本各地の地震とオウム真理教。日本経済のもろさの露呈等が次々と起って、日本人のいま大きく揺れ動き、何によって心の救いを求めてよいかが問われた一年間でした。

オウム真理教の真面目な青年達が指導者の言葉に盲従した為に、自分自身も家族の方々も日本の社会にも大きな不幸をもたらした事を考える時に、私達の心の拠り所をどこにおくべきかが問われた一年間でした。

真の宗教の価値が問われる一年間でした。

被災を受けられた方々の、一日も早い逞しい復興を心からお祈りいたします。

本 庄 昭（灘区）

備えあれば憂いなし

思いもしなかったあの大地震。大天災・大人災など、我人生で経験はよもや無いと思っていたのに…。

私は小学校入学前に父の仕事の関係上、西宮市→三重県→尼崎市にと移り住んだ。西宮市では、第2次世界大戦を経験したようだが、まだ1才未満故、全く記憶がない。終戦後、三重県より尼崎市へ転居したが、ここでジェーン台風を経験した。武庫川の堤防が切れ、アッという間に1階は水浸し、2階の窓より、川となり池となる道路-車が2台通れる道路はその頃の自分には、広い広い道路と思っていた-を見ていたのを思い出す。日頃、子供とはあまり話をしない父が、小さな2階の一室で兄・姉・私とず-と一緒にいてくれ、父と一緒にいることが、瓦を飛ばす風や2階までせまってくる水の恐怖を、何かワクワク興奮させる転換薬になっていたように思い出す。

小学校は神戸市立上筒井小学校に入学した。神戸に住んでからは、小さな台風や雪で日常生活を少々乱されはしたが、天災らしい天災というものは経験しなかった。ただ、平成2年に診療所を建て替えた1年後に神戸上陸の台風がやって来、兵庫県南部に多大な塩害をもたらした。そのため私の新しい診療所の外面の金属部分がさび、業者にその処置をしてもらったことがある。たしか、その費用が80～90万円だった記憶があるが、「エライ損をしたナァー」と家内にボヤいていたそうだ（私は憶えていない）。

そこに1年前の阪神大震災。震災後は何やかやと頑張ったナァーと思うことしきりだが、震災関係のTVはあまり見ない。見てみると「灘区はそんなんちがうでー。モットモットひどかったでー」と思うこと多く、マスコミの震災関係ニュースの取り上げの一方さにブツブツと独り言を言っている。ただ、地震直後より今まで『大地震のあった後なので神戸はもう日本一安全都市』とか『あと999年地震なし』とか『神戸の次は東海、伊豆に地震』とかの、我身は安全だと表現してくれるニュースを好んで見ていたようだ。しかしこの1ヶ月、どうもそうでないでエーと思うようになってきた。冷静になってきたのか??ノンビリしているのか、おそまきながら天災・人災とは地震だけでないのだということにやっと気が付いたのだ。いわゆる災難は忘れた頃にやってくるのだということだ。

我家より、夜ともなれば、東灘・灘・中央区の一部の灯が見渡せる。ずい分と地震前の明るさにもどってきている。台風は?大火事は?山くずれは?飛行機や電車や自動車の事故は?と思うと災難の規模が大・小であっても、我々はどうも毎日安全と災難の間の小路を歩いているような可能性があるナァー、と実感として思うようになってきた。こんな事思うとナーバスになって、暗いナァーと、自分では思うのだが“備えあれば憂いなし”の言葉をモットーにしたいと感じ入っている、震災後1年目の現在です。

本 多 平八郎(兵庫区)

うつろい

四国の西南に、宿毛という町があって、ここ数年来、釣りに通っている。近頃は四国も自動車道が随分と延びて、高知を回っても松山を回っても、神戸を出てから6時間あまりで宿毛に着く。自動車道を下りると、双方、国道に沿っておよそ40kmごとに小さな町がある。

中でも好きな町は高知の窪川、愛媛の宇和島である。窪川では、少年時代を過ごした田舎を思い、宇和島を通ると、徳富蘆花の思出の記が少年の頃を想起させて、そこはかとなない郷愁を誘う。

魚は先方の都合もあって、釣れたり釣れなかったりするが、ちかごろ歳のせいだ釣果にあまり拘りが無くなってしまった。釣れなければ道中を楽しみ、行きつけの一膳飯屋で地酒を楽しむ。

昨年、地震が一段落ついた3月下旬に宿毛に行った時は、飯屋のお婆さんは「生きていたか、よかったねー」と目を丸くした。そのあと、しきりに神戸の様子を聞きたがった。菅原市場の火事が強く印象に残っていたものと見える。

5月の連休に行った時にはお婆さんの話題は地震もサリンも離れて、店をどのように改造するかを熱心に語ってくれた。数年前は宿毛の旧市街から片島港まで半里ちかく続いていた田圃に、今は2本の舗装道路が出来て、どちらも両側に新しい店舗が軒を連ねている。この正月に行った時にはお婆さんの店も取り壊されてコンクリートの基礎が置かれていた。

世の中はどんどん変わって行く。

激しく変わる物の一つにパーソナルコンピュータがある。この世界では3ヵ月ひと昔と言われていて、3ヵ月たてば新しいパーツが開発され世代が変わるという意味である。

そして昨年末にはウィンドウズ95で沸いた。ところがその2週間後には「HOLLOWパソコン」が話題になって、ウィンドウズ95もウィンドウズNTもOS2も色褪せてしまった。

HOLLOWパソコンはソフトを動かすソフト(operating System)を必要とせず、何のソフトも組み込まれていない。

これはワープロでも表計算でもゲームでも、凡て必要なソフトをインターネットを通じて取込み、その場その場で動かす「空っぽパソコン」で、これを500ドルで売ろうというのである。マックもNECもPC/ATも独立して存在する意義は薄れようとしている。

つまり2週間は一昔になってしまった。

医療の分野でも大きな変化の予兆が窺える。マネージドケア(管理による低コスト医療)である。日経産業新聞を読むと、アメリカの民間医療保険には伝統的な出来高払いと、マネージドケアの2方式があって、マネージドケアは定額前払い制で、加入者(患者)一人当たり月額80乃至95ドル前後を会員制健康医療団体が契約医療チェーンに払い込む。

チェーンに属するクリニックは一般的な治療をするとともに、入院治療が必要かどうかをチェック

して病院へ転送し、病院は必要に応じて中核病院へ患者を送る。平均入院日数は5日を切ると言う。

一人当たりの医療費が契約額以下であれば医療チェーンの利益、超過すればチェーンの持ち出しということで、当然医療費は抑制される。

勿論、これは少数の医療機関構成では成り立たない訳で、例示されたシンジケート?は中核病院1、病院7、クリニック2000であった。

患者にすると指定されたグループの医療機関にしか受診出来ず、暇は掛かり、クスリもブランド品は使われず、手抜きが生じるかも分からず、受診医療機関の選択の幅も狭められて余り良くはなさそうだが、保険料が安い為にマネージドケアを選択する国民が増加しつつあると言う。

アメリカのマネージドケア加入率は1996年に76%、2000年には100%に達するという予測ある。その儘、これが日本に移植されるとは思わないが影響は免れまい。

誰もが感じているように、医療の形もそそくさと変わって行く。

往時茫々として一年、「防災とボランティア週間」に因んで地震関連の催しが方々で開かれる。災害から学びとる事は多く問題も多い。

しかし、静かな見方をすれば、兵庫県南部地震による災害も局所的な問題で、私は普賢岳の噴火や奥尻島の地震・津波災害に深く同情はしたが、私にとってそれ以上のものではあり得なかったと同じように、他の地方の人々も自ら渦中にあった訳ではなく、神戸の地震も当然のことながら外からは同情以上の物では無い。人は皆、変化に反応しながら生きていくのに一生懸命なのである。

むかし、親に言われたように、自分のことは自分でしなければならない。

それでも私は釣竿と共に海辺にいたい。 呵々

松 川 善 弥（中央区）

産業医として震災後一年を顧みて

●阪神・淡路大震災の被災者に与えた心の傷

神戸は水害・戦災・地震の3回の被災を受け、何れも市民の復興への意欲で立ち直ってきた。しかし前二者と今回の地震とは様相を異にしている。即ち水害の時は同日間かの雨量と、治山・治水の不十分な結果としてあり、戦災は戦争という非常事態と、国のため耐乏生活をしようという心構えができていた。今回の地震は瞬時にして、経済的に裕福になった生活からどん底へ落とされており、しかも直下型という断層によって被災者と余り被害のなかった人達の差があり、耐乏生活にならされていない、心構えのできていなかったところに起こったもので、心の傷が深いものであった。

震災後の心の動きの変化をみると、最初は生命の助かったことの喜びが大で、本能的行動が表にでていたが、平素からプライバシーが重んじられ、周囲とのコミュニケーションが充分でなかったところへ、避難所という原始的集団がくまれ、漸次不平不満が高ぶって、自己を回復するとともに行政などへの訴えが多くなり、ケースバイケースへのきめ細かい対応と、メンタルヘルスケアの重要性が感じられてきた。

●医療機関の被害状況

県内の病院・診療所・歯科診療所4911施設のうち2514施設(51.2%)が被災し、被災害930億円とも言われ、震災後2～3カ月間は無医地区状態に等しかった。4カ月経っても2割以上の医療機関が診療不能であった。診療再開できない理由として、

- 1.医師が高齢か病弱。
- 2.神戸市の大幅な人口流出(36,000人弱)として患者が離散し、医業経営の見通しが立たない。
- 3.再開のための資金かない。ちなみに雲仙晋賢岳噴火の場合は各種助成が一世帯あたり約1200万円、南西沖約1150万円で、阪神・淡路大震災では1万円～30万円であった。行政、国の援助が望まれる。このような状況での産業医の活動を考えてみたい。

●被災直後の産業医活動

1.事業場の被害状況、従業員の状況の把握が第一であったが、交通機関の麻痺のため、自転車やバイクの必要性があり、道路状況のデコボコなどが交通事故を多発していた。事業場との連絡のため電話も殆ど不通状況で、却って神戸市外より連絡をとりえたということで、ホットラインの開設や緊急連絡場所を30～50km内外に分散することが重要であった。

2.適確な情報が入手できなかった。携帯ラジオや、電気の回復によるテレビなどの報道が、災害に対する緊急用のテープやビデオが準備されていなかったため、間の抜けたものが多く、労働者の

不安が大きかった。

3.ライフラインの電気、電話、ガス、水道が機能を果たさず、停電のときの主動による対応(特に電動シャッター、医療機器などが作動しなかった)、ガスが石油系に代用され、環境悪化への対応、水道、特に生活用水の確保のための共同用水、水運搬のための腰椎症の増加。

4.事業場の有害業務、特に化学薬品の転落防止、有機溶剤による火災発生などへの対応。

5.労務災害、殊に平素から慣れていない業務を手伝うことによって、作業マニュアルを理解していないための事故、災害がみられた。

6.労働者の健康問題として、震災後一週間位してインフルエンザが急増、呼吸器疾患、循環器疾患、消化器疾患、アレルギー疾患、メンタルヘルスケアが重要であった。特に慢性疾患の患者の主治医との連絡がとれないため、服薬や検査の問題もあった。

7.震災による有害物質の流出への対応。

●被災後3～4カ月経過しての産業医活動

1.安全面に比べ衛生面はスタートが遅く、被災者の健康管理が不十分となり、定期健康診断の労働基準監督署への年間報告は30%位に減っており、中災防が委託を受けて、平成7年7月17日～9月30日に亘って約35,000人の問診、身長・体重測定、胸部X線検査、血圧測定、血液検査、肝機能検査、血中脂質検査、心電図検査、聴力検査の補助が行われた。

2.再開にあたって職場の安全点検が第一で、災害時のマニュアルを作成。

3.出向者、自宅待機者、疾病による休職者の把握と、健康管理、特にメンタルヘルス対策に留意を要した。

4.解体作業に伴うアスベスト対策。特に防塵マスク、防護服、周囲を湿潤状態にするなど、従来の短期間に行う工場の粉じん対策と異なり、一般公衆に対する粉じん対策も考え、平成7年4月に「阪神・淡路大震災に於ける民間倒壊建物の解体撤去工事に関する指針」が作成されているので、これに基づいて対応すべきである。

5.建設、土木関係の作業が、新聞紙上に10月初めに道路使用可能など公表して、請負にだすので、重層下請の中で一番激務が下請におりて行き、労働時間短縮など論外になっている。

●これからの産業医活動

1.今回の震災の体験をもとにして、緊急災害対策の点検・チェック項目を、その事業所に特徴的なものを作成する。

2.安全・衛生両面に於いて、労働基準監督署の監督機能を麻痺することなく、労働者の安全と健康のために機能するように、特に下請業者に配慮。

3.騒音、大気、水質、振動など生活環境や作業環境を改善するための対策を実施。

4.職長教育、有機溶剤、特定化学物質、粉じん等の講習会の実施。

5.PTSD(災害後のストレス症候群)。職場が倒壊し、他の事業所へ出向したり、自宅待機や、仮設住宅が通勤に不便なところにあたり、家族や周囲との人間関係などメンタルヘルスケアが大切になってくる。今後多年に亘って表れるこれらの問題を、健康相談室の設置などによってきめ細かく対応して行かなければならない。

6.屋根の瓦葺の修理による転落事故防止。データーによると一軒の店で受注を800軒もっている

とのことで、一日に8軒修理が必要となる。安全ロープなど対策をしないで安易にかかるとう事故を起こし易い。

●まとめ

震災が被災者にもたらした喪失体験や、心の傷は短時間で解消するものではない。しかしただ嘆くだけではなく、この体験から得られたものをプラス思考し、後世に伝えることも重要である。人間は考える知恵をもっており、悲しい中にもボランティア活動が地面に根をおろし、自分が手伝える専門技術を常に磨き、地域ぐるみの組織づくりが連帯意識やコミュニケーションを良くしたことを考え、今まで当たり前のことと思っていたライフラインや人間関係を大切にするためにどうしたらよいか、世界的な日本の技術がもろくも崩壊し、安全と衛生の両面に於けるよりよい状況を保つためにどうしたらよいのか、もっと技術に謙虚になることも大きな天からの警告と考えて、日本人の素晴らしい復興の力を信じて、一年の回顧としたい。

松 原 嘉 雄（東灘）

私のPTSD

小学6年生の年末、列車事故に遇った。踏切りの途中で立往生していたトラックに、乗っていた電車が突っ込んだのだ。当時のY電鉄の車両は木製であったので、衝突の瞬間、車両の前面右半分は脆くも砕け散り、運転手が手慣れた手つきでノッチやブレーキレバーを操作する様子を好奇と羨望の目で眺めていた私と従兄弟の二人は、車外に放り出されていた。頭に負傷し、オーバーの衿がべっとりと血で濡れてい、トラックは横転し、乗っていた電車ははるか前方に停車していた。終戦の混乱期にあった当時の事とて、近くの医院で簡単な処置を受けただけで、電鉄の社員に付き添われて帰った。「大変ご迷惑をお掛け致しまして誠に申し訳ございません」と母が恐縮し、陳謝して一件落着という、今日では考えられぬ結末であった。やがて新年を迎え、福笑いやゲームに大笑いをする度に化膿した傷口が疼いて、散々な正月を過ごした。以後一年程は電車に乗って加速度を感じると自然に全身が硬くなり、先を争って陣取っていた運転手の横手には近付く事が出来なくなった。これがものごころついて初めての私のPTSDであった。

昨年の大震災の後、幾度となく襲って来る余震の度に、実に不気味で不安な気分を体験させられたが、震動の直前に地鳴りとも地響きとも何とも言えぬ底籠もる不快音が前駆する事を知った。その内にこの前駆音を感じて「そらっ、又来るぞ」と余震の襲来を事前に察知し、反射的に身を硬くするようになっていた。以来、大型ダンプが通過して窓枠を震動させたり、近くの解体作業現場で大きな騒音が発生したりする度に、一瞬身体が強ばってしまう。私の第二のPTSDである。

毎年年末には、2、3回「第九交響曲」の合唱団員としてステージに上がる。年毎にちがった指揮者のそれぞれ個性ある指揮ぶりや指導の手腕、曲の解釈に、その都度新しい発見と啓発が得られ、楽しみの多いイベントの一つである。Freude,schoner Gotterfunken! に続くPrestissimoの20小節が鳴り止み、顔を汗で光らせた指揮者が笑みを浮かべて満場の拍手に応える、ソリスト達と指揮者は聴衆のアンコールに幾度となくステージと袖とを行き来する。やがて合唱団員達は、指揮者やソリスト達を讃え、床を踏み鳴らしてアプローズする。大曲を歌い終えた満足感と緊張からの解放感を同時に味わう一時、この快感がこたえられない。

だが今年は違った!「どどどどどっ!!」。百人を超す団員達の床を踏み鳴らす音はさながらあの忌まわしい地鳴りそのものであった。一瞬全身が強ばって拍手どころではなかった。

私の第三のPTSDは震災後一年を過ぎた今、未だ完全には治癒していない。